

目的 肉体的及び精神的に成長発達過程にある中学生に、食本来の意義や目的を理解させ、食を通して心や精神面を育てる意識教育が生涯教育の一助として必要であると考え、中学生は食に対してどのような意識を持っているか、という現状を把握するために調査を行った。それをもとに家庭科教育の食物領域への導入の意義を考察する。

方法 特定地域にあるT中学校の1～3年生男子353名、女子345名、計698名を対象とし、平成元年9月～2年3月に食事をする目的、食事時の気分、家族と共に食事をすることに對する考え等の内容について、集団調査法、記名式で実施した。有効回収率は99.6%、集計は本学コンピューターSASを使用、結果は $x^2$ 検定により有意差の検定を行なった。

結果 食本来の目的である生命維持や健康を考えている者は約10%に過ぎず、生理的欲求である食欲を満たすための者が65%、目的を持たない者や人に言われるから食事をする者も13%あった。また、食事をするとう満足感を味わう者は60%に対し、「何も感じない」という精神的満足感を味わえない者も見られた。家族と共に食事をするについて、82. %の者は「一緒にすべきだ。できるだけ一緒にしたほうがよい。」の積極的な意見を持っていたが、「一緒にする必要はない。一緒に食事をしたくない。勝手にしたほうがよい。」の否定的な意見を持つ者も見られた。全体的に「食」に対する意識は、低いことが伺われた。以上の結果より、中学生に「食」に対する意識教育をすることは、意義深いことであることが示唆された。